

馬場辰二の漢方と実学

——和田啓十郎宛書簡から考える——

徳留 一博

日当山温泉クリニック

馬場辰二(1888~1958)は鹿児島県霧島市の出身で、名医として名高く「赤坂の馬場」と呼ばれていた。馬場は漢方界では醫界乃鐵椎の著者和田啓十郎宛入門請願の書簡(以下書簡と書く)で知られている。今回は次の2点について書簡を基に考えてみる。

1、馬場は20代半ばのとき、大黃牡丹皮湯で盲腸炎を治療している。当時は漢方暗黒の時代で漢方教育の場はなかった。どこで誰から学んだのだろうか。

2、また馬場は東京帝大の出身でありながら学位もとらず、市井の開業医として生涯を終わっている。馬場は診療に有効なものに強い関心を持っており、実学を求めていたように思われる。馬場の実学に影響を与えたものは何か。

①漢方をどこで誰から学んだか：書簡の前半に「……年来漢醫方に非常の長所ある事を悟り他日若し志を得ば何卒斯の道を極めんものと希望いたし居候が……」がある。漢方への関心と知識があることを示している。盲腸炎の大黃牡丹皮湯での治験は青山内科に籍をおいていたときである。

どこで誰から学んだかを郷土人系(南日本新聞社編・春苑堂刊)に知ることができる。それから関連の部分抜粋する。「……わが国の最後の漢方医と言われたのは大正天皇の侍医をつとめた浅田宗伯。数多い彼の門下の中に久木田五介がいる。「腹を切らずに盲腸を治す男」と、東京都下で名を知られた。……五介とは遠い親せきに当たるため学生時代から青山の久木田家に入出入りしていたが、ある日辰二の兄良蔵が急性盲腸炎になり、これを五介が内服薬で治すところを彼は見ていた。以来、五介の漢方に深い興味を持ち、独自の研究を続けていた。……」

このことから久木田五介を通して、馬場の漢方は浅田宗伯の影響を強く受けたことが分る。

②実学に影響を与えたものは何か：馬場が名医として名を馳せたのは、実学の実践の成果と思われる。「漢方の臨床・1巻2号」の座談会で、大塚敬節が馬場に発言を促す際に次のように述べている。“近代医学の診断で漢方薬を使用した経験と云いますか、馬場先生は西洋はもちろん、漢方も民間薬実際に効くというものなんでもとり入れられるという、云わばリベラリストの立場をとっておられますが”これによって馬場の立つ位置が分かる。

この実学の精神の基礎を書簡の半ばにみる事ができる。現代医学(当時)について記した部分が2ヵ所ある。

その1「……所謂學者研究家なる者果たして何事をなしつつあるや……」

その2「……然りとは雖も小生は全く現代醫學を呪ふ者には非ず 其実験を基礎とする系統的分析的の着実なる態度は大に学ぶべしと雖も一面に於ては枝葉に走りて或る大綱を失せるの感あり 殊に其れ臨床治験の直接的検索に於ては大に閑却されたるの感なくんばあらず……」

その1、その2に記されたことの中に、現代医学(当時)の脚気論争をも念頭に置いたものではないかと、演者は推察する。

馬場が入局した内科の教授は脚気病原菌説主張の青山胤通教授であった。高木兼寛による遠洋航海実験の成果は明治17年に明らかにされている。その実績がありながら、日清・日露戦争で、陸軍は脚気によって多くの兵士を失っている。それでも馬場が入局した大正4年当時は、遠洋航海実験の成果を医学会は認めていなかった。このような医学会の状況が、馬場の医師としての方向に強い影響を与えたと、考える。